「天と地が造られる前から」

エフェソの信徒の手紙　1：1-6
詩編139：16-18

２０２３年7月9日
野村　友美 師

＜神が初めに愛すると決めた＞

皆さん、おはようございます。

先週はそれぞれどんな一週間を過ごされたでしょうか？　私は、ちょっとさぼっていた車の運転の練習を再開しました。

初めて一人での運転と駐車にもチャレンジしたんです。走る車線を間違えてトラックに怒られたり、駐車する時に少し下がりすぎて、郵便受けをへこませたりしました。

新しいことって、なかなか大変ですね。

大変ではあるんですが、それでもやっぱり新しいことを始めるのはワクワクするものです。

さて、今日はもうひとつ、皆さんと一緒に新しいことを始めたいと思っています。

今日からしばらくの間、新約聖書のエフェソの信徒への手紙を初めからご一緒に味わっていきましょう。

　天と地が造られる前に、神様は私たちを愛するとお決めになった。何とも壮大なことを、今日の聖書の言葉は私たちに伝えています。

天と地が造られる前、この世界が始まる前から、神様は私たち人間を愛すると決めておられた。

新約聖書の原文はギリシャ語で書かれているのですが、今日ご一緒に読んでいるこの部分で使われている「愛」というギリシャ語は「アガペー」という特別な言葉です。「アガペー」は、この人にはこんな良いところ、美しいところ、素晴らしいところがあるから愛する、という理由付きの愛とは違います。

愛するその相手の側には、愛すべき理由も根拠も何もない。それでも「あなたは私にとって大切にする価値がある」と決めて、尊重して大切に扱う。それが「アガペー」の愛です。

　聖書が神様の愛を表現するとき、この「アガペー」という言葉が使われています。

私たちの側には、神様から愛される理由も根拠も何もない。それでも神様は「あなたは私にとって価値がある、大切だ」とお決めになって、私たちを大事に思い、私たち一人一人を尊重しておられるというのです。

それは決して、私たちがどんな悪いことをしても目をつぶって見ないふりをする、なんていう甘やかしの愛情ではありません。

　このエフェソの信徒への手紙を書いた使徒パウロは、天と地を造る前から私たちを愛しておられる神様が私たちのために何をなさったか、ということを続けて語っています。

ご自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになった。つまり、私たちの罪は罪として裁くけれど、その裁きを神様のひとり子イエス・キリストによってなさることを、神様は選ばれたというんです。

神様を無視して、自分勝手にふるまって、神様が大切に思っておられる誰かや何か、時には自分自

身さえも、傷つけて苦しませたり悲しませたりしてしまう。
そんな私たちの罪を、神様は決してそのままにはしておかれません。
私たち一人一人を愛しておられるからこそ、その愛を無視して歪めて傷つけ合う私たちの罪を取り除こうと、神様は望まれました。
そしてそのために、私たちに罪の罰を与えるんじゃなくて神様ご自身が罰を背負ってくださったんです。
神様のひとり子、神様自身とも言えるイエス様が、私たちすべての人の罪を背負って、すべての人の身代わりになられました。その目に見える証拠が、教会にこうやって掲げられている十字架です。
しかも神様は、この十字架で死んだイエス様を復活させられました。私たちの罪を背負って死なれたイエス様は、死にっぱなしじゃなくて、私たちの命も背負ってよみがえられたんです。
だから、イエス様を救い主だと信じて、そのイエス様を送ってくださった神様の愛を信じるなら、私たちはイエス様に背負われて、イエス様と一緒に神様の子どもとしての命を生きる人になります。
あなたがどんな人でも、今までどんな人生を生きて、どこで何をしてきたとしても、神様は何の条件もつけないであなたを愛しておられる。
あなたの罪を取り除くために、神様のひとり子が身代わりになって苦しんで見捨てられて死なれた。そのぐらい、神様はあなたのことを「大切だ、価値がある」と決めて大事に思っておられる。
その証拠が、この十字架なんです。
あなたに命を与える前から、世界を創られるその前から、神様は「あなたを愛する！」と決心して、神様の子どもにしようと決めて、イエス様によって神様の子どもとして生きる命を差し出しておられるんです。

＜詩篇の詩人とパウロが歌う神＞

天と地が造られる前から、私たちに命をお与えになる前から、神様は私たち一人一人を愛するとお決めになられた。
強さも弱さも、表も裏も、何もかも全部知っておられて、その上で私たちを愛して大切に思っておられる。このことを、神様はパウロに語らせる前から、イエス様がこの地上にお生まれになるよりも前から、ずっと私たちに伝え続けておられました。
　旧約聖書の詩篇１３９篇は、言葉を尽くしてこの神様の愛を歌っています。神は私を、あなたを、全部丸ごと知っておられる。良いところも悪いところも、美しいところも醜いところも。
泣くときも笑うときも、悩むときも感謝で満たされるときも。その上で私たちを愛で包んで、神様の恵みの中で生かしてくださっている。
この詩を読むときに、そしてパウロの言葉を聞くときに、私たちはこんな風に思うのではないでしょうか。
だったらなぜ、この世界はこんなことになっているんだ、と。旧約聖書の時代も、新約聖書の時代も、そして今、私たちが生きているこの時代も。
私たち人間の歴史にはいつだって、理不尽で悲惨

な出来事が満ちあふれています。
今この時も、私たちが生きるこの世界のあちこちで、命を奪い合う争いが起こり続けています。
個人的な一週間の中にだって、いくつもの悲しみや怒りがあっただろうと思います。
神様がおられるならなぜ、神様が私たちを愛しておられるならなぜ、と誰もが問いかけずにはいられないでしょう。
誰の心にもあるこの問いかけに、詩篇の詩人は一つの答えを掲げています。神様、あなたは、わたしの母親の胎内にわたしを組み立ててくださいました。あなたの目にはわたしの骨さえも隠されてはいません。
そう告白した後に、この詩篇を歌った詩人は
神様がなさることの計り知れなさを、驚き喜びながらこう歌い上げるんです。

「わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。まだその１日も造られないうちから。
あなたの御計らいは、わたしにとっていかに貴いことか。神よ、それはいかに数多いことか。
数えようとしても、砂の粒よりも多く、その果てを極めたと思っても　わたしはなお、あなたの中にいる。」（詩篇１３９：１６-１８）

明日の自分がどうなっているか、どこにいて何をしているか、完全に知っている人は誰もいません。明日どころか、次の瞬間のことだって私たちにはわかりません。自分自身のことを完全に知っている、と言い切れる人はたぶん誰もいないでしょう。
今、自分の頭に髪の毛が何本あるかだって、私たちは誰も正確には知らないんですから。
でも神様は知っておられる、と詩篇の詩人は言います。神様が私を、またあなたたち一人一人を形作って、命をお与えになった。私たち自身が知らないことも全部知っておられる神様が、数え切れないほどの恵みで私たちを生かしておられる。
この詩はそう歌っているのです。
　使徒パウロもまた、今日の手紙の始めに、この詩編と同じように神様を賛美する歌を、パウロ自身の言葉で歌っています。エフェソの信徒への手紙の１章３-６節は、日本語の訳では読みやすいようにいくつもの文章に区切ってありますが、
原文は長い一つの文章になっています。
その長い文章の主語は、「賛美されるべき神様」という言葉です。
なぜ、どんな理由で神様は賛美されるべきなのか。
私たちがどんな神様をほめたたえているのかを、パウロはここで一気に歌い上げているんです。
神様の領域のあらゆる祝福で私たちを満たして、私たちを愛して、私たちを神様の子どもにすることを選んで、御子イエス様によって私たちに救いの恵みをお与えになった神様、と。

＜神の愛が私たちを生かしている＞
旧約聖書の詩篇の詩人が歌ったとおりに。
新約聖書の使徒パウロが歌ったとおりに。
神様がずっと語りかけておられるとおりに、神様は私たちを愛しておられます。
神様がお造りになって命を与えたすべての人を、

一人一人に目を注いで、知り尽くして、計り知れない恵みの中で生かしておられます。
ここにおられるみなさんも、生まれる前から、いえ、天と地が造られる前から、神様が「愛する！」とお決めになっていた一人一人です。
良いところも悪いところも、美しいところも醜いところも、私たちの全部を知っている神様が「あなたは大切だ、価値がある」と宣言しておられます。私たちの側には、そんな風に愛される理由も根拠もありません。
だからあなたも、私も、私たちが出会うどの人も、一人として例外ではないんです。
神様がお造りになったすべての人が、天と地が造られるその前から神様に愛され、恵みによって生かされている大切な人です。
どうか今日、このことを改めて心に留めてください。
あなたは、私たちは、私たちが出会わされる人たちはみんな神様が愛しておられる人です。
だから、その愛を無視して歪めて、お互いに傷つけ合う私たちの罪を取り除くために、神様のひとり子が人間になってこの世界に来られて、
すべての罪の責任を背負って死なれました。
そして神様が「愛する！」と決めた一人一人を生かすために、すべての人の命を背負って復活されました。
このことを信じるなら、私たちはみんな、今この時も神様の子どもとして、永遠の命を生きる者です。罪を手放して、イエス様と一緒に神様の愛を生き始めた人です。
迷う時も、悩む時も、暗闇の中にいると思える時も、私たちは神様の愛と恵みの中で生かされています。
私たちを全部知り尽くしておられる神様が、その愛を信じて頼る一人一人を、希望の光で照らして導いていてくださいます。
さあ、パウロが今日の手紙の初めにしたこの挨拶を私たち自身の挨拶にして、今日もここから、神様の子どもとして生きる人生へと送り出されていきましょう。

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

お祈りいたします。